

「食と農」の博物館

展示案内 No.81

展示期間 ■ 2018.10.26 ~ 2019.03.10

東京農業大学「食と農」の博物館

〒158-0098 東京都世田谷区上用賀2-4-28

TEL.03-5477-4033

FAX.03-3439-6528

(URL) <http://www.nodai.ac.jp/syokutonou/>

開館時間 午前10時～午後5時 (4月～11月)
午前10時～午後4時30分 (12月～3月)

休館日 月曜日(月曜が祝日の場合は火曜)・毎月最終火曜日
大学が定めた日(臨時休業がありますのでご注意ください)

東京農業大学「食と農」の博物館
平成30年度企画展



写本/宮城野原 江戸後編 鳥居清信画



写真(左から)/アサヒカメラ(高橋英樹)、アサヒカメラ(高橋英樹)、高橋英樹(アサヒカメラ)



写真(左から)/アサヒカメラ(高橋英樹)、アサヒカメラ(高橋英樹)

ブタになった イノシシたち 展

Wild Boars Becoming Pigs - Domestication

平成30年 平成31年

10月26日[金] ~ 3月10日[日]

開館時間/午前10時～午後5時(12月～3月は午後4時30分まで・入館は開館時間の30分前まで)
休館日/毎週月曜日(月曜が祝日の場合は火曜)・毎月最終火曜日・大学が定めた休日 入館料/無料

東京農業大学「食と農」の博物館 1階企画展示室

講演会
日時/11月10日(土)13:30～15:30 日時/11月2日(金)～11月4日(日)13:30～14:30
会場/当館2階セミナー室 会場/当館1階企画展示室
演題/「知られざる道牧ブタの世界」 講師/東京農業大学「食と農」の博物館 学芸員
講師/池谷和信(国立民族学博物館)

東京農業大学
「食と農」の博物館
Food and Agriculture Museum
TOKYO UNIVERSITY OF AGRICULTURE

〒158-0098 東京都世田谷区上用賀2-4-28
TEL.03-5477-4033 FAX.03-3439-6528
www.nodai.ac.jp/syokutonou



【主催】東京農業大学「食と農」の博物館 【共催】東京農業大学新情報課程・転修学生 【協賛】一般財団法人畜産学研究所 在来畜産研究会
【協力】国立科学博物館 長崎歴史文化博物館 名護博物館

poster design : egypta + maki studios

ごあいさつ

「ブタになったイノシシたち展」の開催にあたり御挨拶申し上げます。

この企画展は、2019年の干支に因んでの開催という意味合いとともに、イノシシが私たちと如何に関わり合い「食」や「農」に貢献したかを再認識したいと考えます。

「亥の年」は、植物学的な視点から見れば、翌年から始まる成長に備えて知識や精神を育む時期とされています。植物の特徴を捉えて人間生活に例えるよりも動物の持つ性質や特徴と人間における生活リズムと関係付けた方が干支の意味を理解しやすいと考えた先達は、十二支に動物を用いて表現するようになりました。

その時代は古く、亥は私たちの生活に密接な動物として十二支にいち早く取り入れられたようです。すなわちヒトが健康に生活するためには、「猪突猛進」のごとく、目標に向かうことも重要でしょう。また、生命を繋ぎ反映するためには、栄養価が高く、病気の予防になる猪肉の利用が「無病息災」をもたらしたと考えます。

初夏のころに里山をきのこや山菜取りで散策すると「ウリボウ」に出会うことがあります。その近くには必ず大きな体をした母親らしきイノシシがどっしりと構えており、母性愛を感じます。一般的にイノシシは、季節繁殖で年一回の出産であり、五匹よりも少ない子が育つとされています。さらに肉は、食べる木の実などの種類の違いや季節によってその成分や旨味も大きく変わることも知られています。

人口増加や人間生活の変化に伴い、野山でのイノシシ狩猟では食料としての確保が困難となりました。良質なタンパク源を得るためには、野生イノシシの改良がヒトにとって必要だったのではないのでしょうか？

イノシシがブタとなったのは、ヒトに望まれて繁殖や育種が繰り返され、家畜化されて通年繁殖で多産なブタへの道が開かれたからです。

「家畜繁殖学」、「家畜の改良技術」は、時代のニーズに応じていろいろな形で研究されてきました。動物の改良などは、生命倫理や環境保全の面からその方向性を考えなくてはならない重要な事柄です。

私たち人間は、他の動物とともに共存し、ヒトとしての繁栄も繋げていかななくてはならないのです。地球規模での生命科学、食糧問題、環境問題をこの企画展では「ブタになったイノシシたち」といった生命が受け継がれる重要な意味合いと、次世代に向けた食料などの需要に関する「食」と「農」の源流を多くの皆様に発信する機会になればと考えています。

国内外の多くの皆様に「動物の家畜化の意味」、「生きることの大切さ」の道しるべをお届けしたく東京農業大学「食と農」の博物館へのご来館をお願いする次第です。末筆ではございますが、本展示に際してご協力・ご支援いただいた各位に心からご挨拶申し上げます。

館長 江口文陽



開催にあたって

来年の干支に因んだ企画展です。日本の歴史を省みると縄文・弥生時代でのイノシシやブタ飼育に関する記述や、奈良時代での飼育を窺わせる史料も存在します。しかし、仏教伝来以降、肉食禁止令が出されるとその情報は少なくなり、一方、食肉を目的としない牛馬や鶏については、わが国の歴史をとおして顕著であります。再びブタの情報が現れるのは戦国・江戸時代になってからですが、ここでのブタは今日、私たちが目にするブタとは姿形が大きく異なり、中にはイノシシのようなブタも見受けられます。その後、明治時代以降は、外国で改良されたブタが主流となっております。

本企画展はイノシシがブタになる所謂その家畜化について、両者の生物学的関係や人間とのかかわりをとおして紹介した内容です。また、これまで殆ど知られていないアジア辺境で飼われている、原種のイノシシに最も近いとされる在来ブタの実体についても紹介しました。それは専門的で難しいと思われるかも知れませんが、貴重な標本類をはじめ多くの写真や絵画史料を紹介した展示ですので、ご覧になるだけでも興味を持って頂けるものと思います。

これまでブタといえば西洋品種を対象に語られてきたイメージで理解されている傾向にあります。本展をとおして、新たなブタに対する理解を持って頂けることを願っております。

監修 東京農業大学名誉教授 田中一榮

世田谷にイノシシがやって来た

沖縄本土復帰の翌年の1973年2月、東京では北風が吹き荒れていた。わが国の最西端、八重山群島の西表島から20kg程の小柄なイノシシ2頭の雌雄が羽田空港に到着し、当時、本学世田谷キャンパス2号館裏側にあった動物舎に運ばれた。

これはイノシシがブタの原種であることから、その研究のために大学が導入したのだった。亜熱帯の西表島とは異なる環境に移されたため、雌は1週間程で息絶え、雄は東京での寒さを乗り越え1年程飼育された後、2度目の冬を迎えた時に死亡した。飼育は僅か1年だったが、今にして思えば、それを担当した未だ若い筆者にとって「イノシシがブタになる」、所謂「家畜化」という人間と動物とのかかわりの中で生じる魅力的な生物変化の一端を知る機会となった。

イノシシは半年程で餌を与える学生たちに懐き、時には柵を乗り越えグラウンドに飛び出すこともあった。幸いグラウンドで部活動中の学生たちの手助けで、追い駆けられたイノシシが疲れ果てたのだろうか、自ら動物舎に戻ったのである。ブタやヤギ、ヒツジも飼われていた長閑なキャンパスだった。もしイノシシがその周辺の住宅地や世田谷通りに侵入してしまったらと、思い出す度に大事に至らなかったことに安堵しているのである。

このイノシシが無事に戻ったのは、人間の環

境に徐々に慣れ始めた頃だった。古代の人間と動物とのかかわりにおいても同様なことが繰り返され、何時しかその家畜化へと向かっていたのだろうか（写真1）。イノシシを飼った経験から43年。最近、市街地に出没し、人間に危害を加えているイノシシのニュースが絶えない。山の動物のイメージの強いイノシシが何故、人間社会に侵入するのか。それは、家畜化され易い動物故のことだろうか。本展のブタになったイノシシをとおして解説したい。



写真1 初対面の筆者に懐く奄美大島のリュウキュウイノシシ (*Sus scrofa riukiuanus*)。かつて大学に導入したイノシシも、このように懐いたかも知れない(撮影：森井貴也 氏)。

ブタの原種—イノシシの世界

イノシシがブタの原種であるならば、両者を交配させ正常な生殖機能を持つ雑種（写真2）、所謂、一般に「イノブタ」と呼ばれる家畜を生産することは可能である。それぞれの染色体数が $2n=38$ であることから明らかだ。実際、各地の養豚場では雄イノシシが豚舎に侵入し、ブタと交配し雑種が産まれた話もある。

イノシシがブタの原種であることは、学名の *Sus scrofa* にも表されている。すなわち、家畜化されたブタは、その学名の基で *Sus scrofa var. domesticus* L. となる。したがって、イノシシの一亜種の扱いとする考えもある。動物分類では哺乳類の代表でもある鯨偶蹄目のウシやヤギ、シカなどと同じ分類群に属し、イノシシ科に分類される。鯨偶蹄目といっても他の仲間と異なる多くの特徴を持っている。すなわち、イ



写真2 イノシシとブタの交配によって産まれた雑種・イノブタ。子どもはウリ坊と白に黒斑の毛色である。

ノシシは森林に棲む雑食動物で、木の実、草の茎葉をはじめ昆虫類やミミズなど、そして排泄物をも食べることから、自然界の掃除屋 (Scavenger) ともいわれている。頸は短く、目は小さく視力は弱いが嗅覚が優れている。犬歯が発達し強力な武器にもなる。胃はウシやヤギ、シカなどの草食獣の複胃とは異なり単胃で



①



②



③



④

写真3 *Sus*属4種のイノシシ。①イノシシ(*Sus scrofa*)、ユーラシア大陸と周辺の島々、アフリカ北部、②ヒゲイノシシ(*Sus barbatus*)パラワン・ボルネオなどの島々、マレー半島、③スンダイボイノシシ(*Sus verrucosus*)ルソン、セブ、セレベス、ジャワなどの島々、④コビトイノシシ(*Sus salvanus*)インド・アッサム地方。ブタの原種は大陸各地のイノシシであり、他に家畜化の過程でヒゲイノシシとスンダイノシシの2種もかかわったとされている。実際、この2種はブタとの交雑も観察されている。種の定義は、「潜在的に交雑可能な自然集団で、他のグループからは生殖的に隔離されている」という生物学的種 (Biological species) に従えば、そのように *Sus* 属内の種間交雑の問題が未だ解明されていないため、本展では従来の Haltenorth (1963) の分類に従った。



①



②

写真4 ①フィリピン・ミンドロ島山岳地のスンダイボイノシシ(*Sus verrucosus minutus*)とブタとの交雑種(Kurosawa et al.,1989)。②パラワン島のヒゲイノシシ(*Sus barbatus ahoenobarbus*)とブタとの交雑種。子どものときから吻に髭がはっきりと現れている。

ある。単独生活であり繁殖期には群れを作り、一夫多妻で、雄同士は闘争して強い雄が雌を独占する。そして4頭から6頭程の多産であることが大きな特徴である。

イノシシの棲息はユーラシア大陸を中心に周辺の島嶼域、およびアフリカ大陸北部まで見られ広大であり、その形態特徴が多様である。実際、大陸西側のイノシシ集団には染色体数が $2n = 36$ の個体も確認されていることから、イノシシの分類では最近まで何度となく再検討が繰り返されてきた。他にイノシシに近縁の仲間とされるスンダイボイノシシ、ヒゲイノシシ、そしてイノシシ科では最小のコビトイノシシと呼ばれる仲間(写真3)もアジア地域に見られ

る。しかし実際、前者2種のイノシシとブタが交配している事実(写真4)があり、*Sus*属内の種分化の問題が詳細に解明されないまま、新たな分類が提唱されるという問題もある。

ブタの原種イノシシとはさらに遠縁になるバビルサ(写真5)と呼ばれる仲間がインドネシアのスラウェシ島とその周辺の小島にいる。その特異な風貌からブタの起源や系統を論じるうえで、対照的存在として紹介されることが多い。さらにアフリカにはイボイノシシやカワイノシシ、モリイノシシ、それに南米にはペッカーリーが、それぞれ棲息する。いずれもイノシシ(*Sus scrofa*)とは遠い関係にあり、このようにイノシシの仲間は多彩で複雑である。



①

写真5 ①バビルサ(*Babirusa babirusa*) [Barr's Buffon Buffon's Natural History] 1807年 ロンドン 銅版画。



②

②バビルサ雄の頭蓋骨(国立科学博物館蔵)。インドネシア語のバビルサはbabi・ブタ、rusa・シカを意味し、その名のように、反転して上方に伸びる上顎犬歯が上顎を貫いて、角のように顔面から突き出ている。

イノシシとブタの違い

まず日本語のイノシシとブタからは、全く別の生き物という印象を持たれることがある。ブタ飼育の歴史で古い中国ではイノシシは野猪、ブタは家猪とされ、両者の関連性を窺うことができる。他のアジアの国々も同様で大きく異なることはない。イノシシの語源では「イ」は鳴き声で、「シシ」は獣肉という。ブタはブーと鳴くことに由来するという諸説もあるが詳細は定かでない。

両者の違いについては度々話題になることがある。一般的には尾が真直ぐなのがイノシシで、巻いているのがブタ。また耳は大きく垂れ、毛色が白や白黒斑のものがブタ。仔どもが暗褐色の縦縞模様の毛色をした「ウリ坊」がイノシシと決めつけられることがある。こうした思い込みはブタといえ、高度に改良された西洋のブタ品種を見慣れていると、そのように

思ってしまうのであろう。かつて専門家ですらそのように認識していたことがあった。

では写真6のブタについて読者は、どのように思われるだろうか。これはネパール辺境の地方ブタである。頭部は直で耳小さく立ち、体型は細くスマートだ。そして尾は巻いていないし、毛色はイノシシのように暗褐色で、仔ブタの中にはウリ坊も見られ、また成獣の頭部から背中にかけて発達した鬃たてがみもある。調査ではイノシシと思い込み、尋ねたところ「ブタだ!」と、案内人が答えたのである。こうした特徴を見る限り、両者の違いを外見的に見分けることは不可能であるが普段、見慣れている現地の人はその違いを感覚的に捉えているのだろうか。中には「山に居るのがイノシシで、家で飼うのがブタ」と語る現地人も居る。考古学では遺跡出土の骨から、両者との違いを見出したとする



写真6 イノシシのようなネパール辺境の地方ブタ。この地方のインドイノシシ(*Sus scrofa cristatus*)とブタは、かなり発達した鬃を持ち、また乳頭の数や配列など、他の形態特徴においても両者は極めて良く類似している。同地方の両者は度々、交雑を繰り返している可能性がある。



報告がある。これは家畜化が進行し、飼育環境の影響で現れた形態変化の結果でしかない。

参考までに示した写真7 (P.8~9に掲載)は、いずれも36カ月齢雄の野生と飼育イノシシの頭蓋骨および生体についてブタを含めての比較である。興味深いことに飼育イノシシには野生では見られない形態特徴が既に現れており、如何に飼育環境の影響が大きいかが分かる。このような変化をどのように捉えるかが、イノシシとブタの違いを判断するうえでの難しさでもある。

イノシシとブタの境界線

家畜の定義は「生殖が人間の管理のもとにある動物」とされる。但し、動物園における展示動物がその生態環境に合わせた恵まれた条件下で飼育され、繁殖可能だったとしても家畜とはいえないだろう。広義ではマウスなどの実験動物をはじめミツバチやカイコ、金魚、鯉なども家畜の範疇とされ、農業用動物を対象とした家畜であれば、人間の生活リズムの環境下でも無理なく飼育が可能で生殖を繰り返し、人間に肉や乳、皮革、卵、労働などの富をもたらす動物を指すだろう。また「形態特徴が遺伝的に固定され、代々受け継がれていくことが家畜である」ともされている。この解釈については、明らかに改良の進んだ品種を対象としているため、原種と家畜種の違いを強く印象付けている。

しかし、家畜は管理が緩ければ、人間から逃れ野生化しやすい動物でもあるが、再び人間の環境下に戻ることもある。このようなことを繰り返す中で、殊にブタは原種が広く現存する家畜だけに、両者との交雑は各地で見られるのである。前述のように豚舎にイノシシが侵入しイノブタが産まれた事例や、粗放的に飼われるブタ

がイノシシと交雑している事実があり、人間のもとで生殖が完全に管理されないため、先の定義から外れてしまう。ここでのブタはイノシシと区別することが不可能で中間的な外貌を持つことから、どこまでが野生で、どこからが家畜なのかの境界線は不明瞭であり、両者は連続的な関係を持つことになる。

かつて本学にあった家畜血清学研究所で、ユーラシア大陸産イノシシと西洋のブタやアジア在来ブタの血液型の研究が行われた。結果は大陸西側のイノシシと西洋ブタ、また大陸東側のイノシシと在来ブタの血液型がそれぞれ互いに類似しており、最近のDNA研究でも同様の傾向となった。すなわち、世界のブタは原種であるイノシシの一亜種と見なされるグループの中に位置づけられ、両者は遺伝的に連続的な関係にあり、そこには境界線は存在しないのである。また、これらの結果は、ブタの家畜化の起源が大陸の東西間の広い地域で、それぞれ独立的に始まったことを物語っていることにもなる。

写真7 野生と飼育イノシシ雄の頭蓋骨、
全身骨格および生体等の比較。



左から①野生ニホンイノシシ(四国産) ②リュウキュウイノシシ(西表島産) ③飼育リュウキュウイノシシ(西表島産)
④飼育リュウキュウイノシシ(沖縄島産) 野生に比べ、飼育イノシシが全体的に肥大化しているのが解る。



左から①野生・②飼育リュウキュウイノシシ(西表島産) ③飼育リュウキュウイノシシ(沖縄島産)。飼育されると頭蓋骨の変化はサイズや前頭骨に現れる。②は本学富士農場で飼われた個体。ブタ用濃厚飼料で飼われた為、頭蓋骨は肥大化している。③は放し飼い2世代の個体。前頭骨が凹むなど大きな変化が現れている。詳細は解らないが、後頭骨頸静脈突起の先端が①の野生と比べ、②と③の飼育個体でカーブするように変化している。



西表島産リュウキュウイノシシ雄の全身骨格(製作協力：沖縄県竹富町猟友会)。
 イノシシの肋骨は14対であるが、家畜化され改良の進んだ西洋品種では16対に変化する。乳頭数もイノシシでは5対を中心に4対から6対だが、ブタでは6対・7対を中心に5対から9対に変化している。しかし、アジアで飼われるイノシシのような地方ブタ(在来)はそのように変化している訳ではない。両者は殆ど類似する形態特徴を持っている。



左から①イノシシ ②桃園種 ③ランドレース。原種イノシシとはブタの頭蓋骨が極端に大きく異なる。このような変化は家畜化開始後、どれ位の世代を要するのだろうか。



左・野生イノシシ雌 右・飼育イノシシ雄

雌雄は異なるが、体型に大きな違いが現れている。特に飼育イノシシの胴体はブタのように肥大化したことで、脚も短くなっているように見える。飼育環境に大きく影響されたものと考えられる。頭蓋骨の変化と合わせて考えると、家畜化による形態の変化は極めて早く現れるのだろうか。

家畜化 —何故ブタになったのか？

これまで度々述べてきた『家畜化』とは実際、何だろうか。人間は狩猟採集時代、食料を得る日々の暮らしの中で野生の動植物とかかわり、多くの知識や経験の蓄積を繰り返してきた。そして1万年程前、人間は動植物を自己の管理下に置くことで家畜および作物を誕生させたのである。所謂、家畜化と栽培化であり、英語ではドメスティケーション (domestication) と呼ばれている。

今日の主な農業用家畜の家畜化の起源は、ユーラシア大陸各地で始まったとされ、ドメスティケーションは生活技術を生み出し、さらには文明の発祥ともかかわることから、考古学や人類学、民族学、農学、動物学、家畜学などの分野から関心が持たれてきたが、その全容の解明には未だ至っていない。

家畜化は単に野生動物を捕まえ囲いの中で飼育することではない。それは人間のもとでその

繁殖が次世代へと恒常的に行われ、結果として品種造成へと繋がることでもあり、つまりは生け捕りや餌付けによって飼育開始から続く連続的な過程なのである。殆どの家畜の原種が絶滅している中で、ブタの原種であるイノシシは未だ現存し、飼育も広く行われ、実際その家畜化が継続しており、その一端を垣間見ることのできる動物でもあろう。

何故、家畜化が生じたかは、自然、人間、動物のそれぞれに要因があるとされる。殊にイノシシでは人間側の要因として生け捕りや餌付けなどの行為があって飼育は開始される。また動物側としてはその生態や習性にもみることができるだろう。その第一がイノシシは広大な分布域を持つことから、多様な環境での適応能力を備えていたからだ。雑食性という実に多彩な食性を持ち、農作物を荒らし、残飯や排泄物も漁るなど人間の生活圏内にも侵入するイノシシは、人間との関係を築き易かったのである。

現代、わが国ではイノシシの飼育 (写真8) は全国各地で散見され、その目的はペットや自家消費、販売、イノブタ生産等である。イノシシの飼育は家畜化の起源地であるアジア各国の辺境域でも行われている (写真9)。このようにイノシシの飼育が広く行われていることは、潜在的に飼育対象にし易い動物であったから

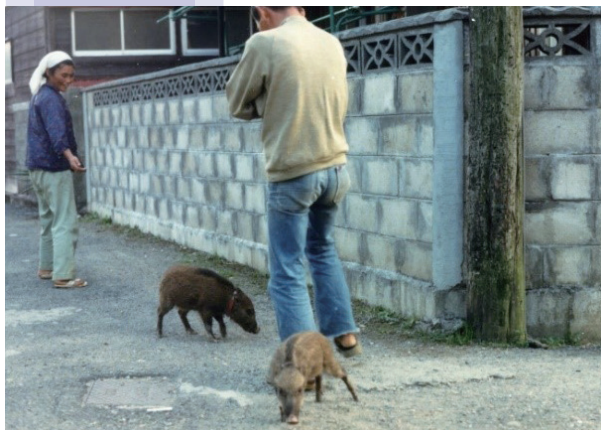


写真8 ペットとして飼われていた仔イノシシ。集落内は放し飼いであり、夕刻には飼い主の所に戻ってくる。

写真9 ネパール平野部で観察したイノシシ飼育。家畜化は過去のイベントではなく、現代まで続いているのである。



で、家畜化は容易に開始されたのではないだろうか。

1万年程前のイノシシの家畜化を詳細に知ることはできないが、今日各地で見られる飼育現場での観察や聞き取り調査から凡そ推察できるだろう。現在まで国内外の調査で、100件以上の飼育現場の50%以上が狩猟や日常生活の中で偶然、子どもを生け捕りしたことで飼育を試みていた。群れを管理下に置くヒツジやヤギのような遊牧家畜の家畜化は容易ではないとされるが、子どもの生け捕りと飼育が生じ易いイノシシにとって家畜化の進行は比較的速く進行したのではないだろうか。

他に餌付け（写真10）により飼育を達成した

飼育者もいた。最近、広島大学の西堀正英博士はタイ国北西部の集落で、餌付けによる半飼育的なイノシシの存在を確認している。これらの事例は、その家畜化は過去のイベントではなく、いつの時代でも起こりうることを示しているのである。

イノシシの生息地で暮らす人々にとって彼らとの出会いは自然であり、その生け捕りや餌付けなど人間の偶発的行為は当然起こり、飼育は開始されるだろう。これが繰り返されることで知的経験が次第に恣意的に継続され、人間の環境のもとでも繁殖が可能となり家畜化はさらに進むのである。



写真10 餌付けによって達成した放し飼いのイノシシ。25年程前、畑で昼食をとっていた老人が、森から現れた数頭のウリ坊に昼食の残りを与え、これがきっかけで、餌付けを繰り返し続け、徐々にウリ坊を畑に定着させながら、その周りに囲いを作り、飼育と繁殖を可能にした。人間によって管理されているため、半飼育的な家畜のようでもある。飼育者の中にはイノシシを家畜として認識している者もいる。

家畜化されたブタ

ブタは家畜の中で、ユダヤ教やイスラム教国を除く多くの地域で食材として利用されている。世界の食肉は豚肉が40%、鶏肉が29%、牛肉が24%であり、最も多く食されているのが豚肉である。また皮や骨、血液も利用され、更に生理機能が人間に近いことから医学用実験動物としても利用されている。このように私たちにとって身近な存在であるはずのブタは、決して良いイメージで思われることはない。臭い、汚いと中傷され、ある人間に対して「ブタ」と蔑称して呼ぶこともあり、他の家畜と比べれば一般に好まれる動物ではない。ブタは一方、多産や幸運のシンボルともされることから、古代ローマの貨幣にその絵柄が見られる。

世界最古のブタは今から1万1千年程前の中国広西省桂林甌皮岩遺跡から出土したその歯と骨から知られており、また西アジアでも古いタイプのブタの骨が出土している。ブタは定着農耕民の家畜とされ、ウシ、ウマ、ヤギ、ヒツジなどの遊牧家畜に比べ人間に伴う移動は緩やかだったとされているが、食肉資源として身近で小型のブタであれば、人間の移動ではむしろ簡単に運ばれ易い家畜であろう。事実、各地の離島から古代に持ち込まれたブタとみなされた骨の出土があり、漢代の中国ではローマ帝国にブタが輸出され、中国南方域には船上ブタ飼養民の存在、更には太平洋の島々へもブタが

広く運ばれていたことを考えれば、世界の交易史でのブタの移動はむしろ盛んだったと見るべきだろう。

現在、日本人が食肉の対象としている豚肉は、殆どが西洋品種である。これらは主に大陸西側のイノシシを家畜化したブタ（写真11）を基に、18世紀に英国で始まった近代の家畜改良において中国や東南アジア原産のブタ（写真12）を導入し、交配して造り出された改良品種である。現在、世界で100品種程が存在し、中でも優れた品種として飼われているのは約30種とされている。わが国では主にランドレースや大ヨークシャー、デュロックといった西洋品種が飼われ、これらの3元交配種が食肉用として利用されている。

では、大陸東側のイノシシを家畜化したブタとなると、中国には1回の出産で30頭程の仔ブタを産するような梅山豚の存在で一時世界的に注目されてはいるが、アジアには未だ知られていない地方種が数多くいる。これらは「在来ブタ」と呼ばれ、家畜化されて以来、その土地の気候風土の中で育まれてきた家畜である。しか



②

写真11 大陸西側のイノシシを家畜化し育種改良された西洋品種。現代品種と変わらない特徴をしている。尾が稍々巻きかかっているように描かれている。しかし、中世まではイノシシのようなブタで、その飼養は森などで放し飼いだだったという。①『Barr's Buffon Buffon's Natural History』1807年 ロンドン 銅版画 ②『William Jardine "Naturalist's Library"』1834年 ロンドン スティール版画(本学学術情報課程蔵)。



①

し、近代化で高能力を持つ西洋品種が導入され、在来ブタは雑種化が進み、また西洋品種と入れ替わり、殆どが絶滅に近い状態である。それらの在来ブタを紹介する前に、わが国で飼われてきたブタについても触れてみたい。

【わが国の歴史に登場したブタ】

ブタの存在が確実視されるのは農耕が本格化した弥生時代であり、それは大陸から持ち込まれたとされる。そして奈良時代には、その飼育を窺わせる記述も見られるが、仏教伝来以降、肉食禁止令が広まるとブタ飼育の史料は僅かになる。また動物渡来の記述としては、16世紀初頭に完成したとされる辞書、『文明本節用集』には「家猪^{ブタ}」の収録が初見とある。

江戸時代には南蛮交易図にイノシシのようなブタが描かれている。幕末には長崎の出島では家畜の特徴から東南アジアや中国からウシやヤギなどと共に移入されたブタ（写真13）が、また外国人居住地などの沿岸部でもブタが飼われ、それが海外でも紹介されていたから驚きである（写真14）。薩摩の江戸藩邸ではブタが飼われ、またシーボルトが参府の折、ブタの眼の解剖および手術の講義を幕府の医官に行ったと



①



②

写真12 大陸東側のイノシシを家畜化した中国や東南アジアの在来ブタ。体型的には耳が小さく、尾は真直ぐであり、イノシシの体型に近い。①[Alcide Dessalines d'Orbigny Natural History]1849年 パリ スティール版画 ②[William Jardine "Naturalist's Library"]1834年 ロンドン スティール版画(本学学術情報課程蔵)。



写真13 唐蘭館絵巻 蘭館図 動物園図 川原慶賀画(江戸後期)長崎の出島で飼われていた家畜動物。左下にブタ4頭が見られる。家畜の特徴から東南アジア方面から持ち込まれたと考えられる(長崎歴史文化博物館蔵)。



JAPANESE PIGS.



THE PENINSULAR AND ORIENTAL COMPANY'S SHIP CANDIA UNDER REPAIR ON THE ANAKAH REEF.

In October, 1860, the Candia, becoming disabled in the Red Sea by the fracture of her screw-shaft, was towed into Soos and anchored off Point Zensib. There being no docks there, it became a very serious question with so large and valuable a ship, what was to be done to repair the damage so as to render her efficient and capable of resuming the important duties assigned to her between that port and Calcutta. But one mode presented itself, requiring much practical seamanship, inventive skill, and much resolution in encountering the great probability of risking the safety of a ship of 3000 tons for an hour or a day as it was likely to convey from any sudden advent of a violent storm of wind or furious, hurricane gales to have been blown up and out and land the broken shaft, which occupied us ten anxious and hard-working days.

work accurately, she proceeded to Calcutta, arrived there in perfect order, was docked, examined, and pronounced by the authorities as not requiring the slightest interferences with her new shaft or repaired screw.

Upon the admirable conducting of so important an operation under such critical circumstances it is unnecessary to comment, beyond observing that it goes to show Captain Curling's previous reputation was well deserved, and it would be an injustice to the Peninsular and Oriental Company, as to the class of ships they employ, to omit stating that the Candia, although so large, long, and heavy a ship, so often moved and removed upon and from the Anakah Reef, sometimes remaining in a most trying situation upon it for a week did not show the slightest symptoms of straining.

JAPANESE PIGS.

The engraving that exhibited specimens some very curious specimens of the porcine tribe which are now in the possession of Mr. Charles Jamrach, of Hatfield-Highway, a well-known importer of wild and rare animals. It is stated that they have qualities which would render their mixture with our native breeds advantageous. At any rate, the Acclimatization Society of Vienna has already availed itself of the opportunity of securing some of these pigs, so that there is a probability of their becoming familiar in Europe. When referring to an published not very long ago, states that, though abundantly stocked with pictures and carvings of dragons and all other acts of monstrosity borrowed from the Chinese, the Japanese engine is but sparingly provided with four-footed beasts, wild or tame. The country is too much cultivated and peopled to afford cover to the wild quadrupeds, and the same are bred only for carriage and agriculture. The use of animal food is interdicted by the national religion, and they have not left pasture enough to support many sheep and oxen. They have a few swine, which were brought over from China, and which some of the

写真14 The ILLUSTRATED LONDON NEWS (SUPPLEMENT, JAN. 11, 1882)。JAPANESE PIGSとして日本のブタが紹介されている。形態的特徴から明らかに中国系のブタである。沿岸部に住む日本人が中国人船員に売る目的で飼っていた(本学学術情報課程)。

され、それらが、どのようなブタだったのか興味深い。最後の将軍徳川慶喜はブタ肉を好んで食していたという逸話もある。そして明治維新を迎え、「日本の博物館の父」と呼ばれる田中芳男(後の本学前身の東京高等農学校初代校長)が明治6年(1873)のウィーン万国博覧会に新政府の事務官として派遣された時に、持ち帰った「独逸農事図解」に西洋のブタ品種と共に西洋式養豚が紹介されている。それが駒場農学校の教科書にもなり、広く西洋品種が知られるようになる。

一方、肉食禁止令の影響が少なかった奄美・沖縄地方では古くからブタ飼育が盛んだったことを思わせる興味深い史料(写真15)は多い。戦前まで西洋品種とは外貌特徴の違いの解るブタ(写真16)が飼われ、それらは中国や東南アジアから持ち込まれたブタであり、それと一緒に

に伝わったと思われる飼養形態や、一見イノシシとの関係をも窺わせるブタも見られ極めて興味深い。現在、当時の特徴を完全に残したブタを見ることは出来ないが、「島ブタ・アグー」という呼び方で飼われている沖縄のブタには若干の面影を残しているに過ぎない。

【アジアのブタ】

アジアの国々では、家畜化が最も早かった中国が多く、の在来ブタを造り出してきた。既に紀元前には猪圈(ブタ便所)と呼ばれる明器(写真17)に、イノシシとは姿形が異なる改良の進んだブタも模られている。更にはブタの登録も行われていたというから驚きである。当時の中国社会にブタが広く行き渡っていたのである。

中国には、現在60種程の在来ブタが現存しているとされ、多様な形態特徴を持つブタを育んできた。その特徴から、1) 耳が大きく垂下、



写真15 琉球嵐真景(江戸後期)に描かれている島ブタ。(名護博物館蔵)。耳に紐を通した飼養法は、現在でも広く東南アジア地域で行われている。

頭部が短広で、顔面しゃくれ、体側には皮皺があり、腹部が垂れるなどの特徴を持つ大型や中型のもの、2) 耳が小さく、頭部がイノシシのように長く、背線は真直ぐか、垂下するもの、そして、3) 頭部は短い真直ぐで、腹部は極端に垂れる中型や小型のものがある。このような中国ブタについては、地理的環境の違いに基づいて北部から南部及び高原のタイプとして分類されている。さらには華僑の移動に伴いそれらのブタは、東南アジアの国々の山岳地や島嶼域まで運ばれ、飼育されている。筆者はこれらのブタを「大耳種型在来ブタ」と、「小耳種型在来ブタ」と呼び区別している(写真18)。近年では、これらの両タイプのブタ間で、更には西洋品種との交雑も進み、多様な形態特徴を持つブタも見られるようになり、それらの純粋種の殆どは希少種となっている。

そして、アラカン・ヒマラヤ山脈を越えたバ

ングラデシュをはじめネパールやブータン、インド、スリランカの南アジアの国々には、小耳種型在来ブタの他に、イノシシと姿形が類似するブタが飼われている。それを「イノシシ型在来ブタ」(写真19)と呼んでいる。この仔ブタの殆どはウリ坊である。殊にイスラム教国のバングラデシュでは、イノシシ型在来ブタ100頭程の群れによる移動放牧(写真20)も見られ極めて興味深いブタ飼養文化が存在する。またネパールやスリランカの辺境ではイノシシの飼育も見られ、同地の在来ブタと交雑している可能性もある。実際、この在来ブタ集団では同地方のイノシシ固有の遺伝子が確認されている。

すなわち、これらの地域ではブタになるイノシシたちの家畜化過程の一端を観察することが可能な極めて貴重なブタ集団なのだが、殆ど知られず、その飼養形態と共に姿を消しつつある。



写真16 大正時代に飼われていた島ブタ(提供：高田 勝氏)。



写真17 猪圈(ちよけん)を模った明器・中国漢代。(提供：西谷大 国立歴史民俗博物館教授)。猪圈とはブタに餌として人糞を与える機能を有した飼育舎、「ブタ便所」ともいわれている。明器は死者とともに墓におさめられた器物のことで、漢代から唐代にかけてさかんにおこなわれた。



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨



⑩

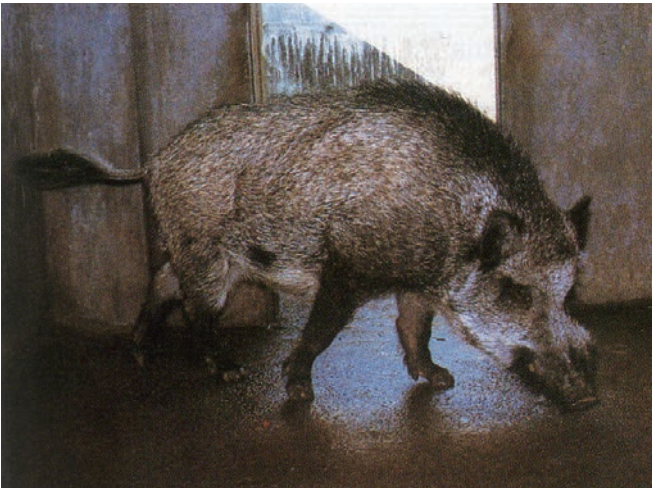


⑪



⑫

写真18 中国ならびに東南アジア地域で飼われている大耳種型在来ブタと小耳種型在来ブタ。
 ①八眉豚 ②太湖豚 ③桃園豚 ④安康豚 ⑤タイ大型豚 ⑥カンボジア在来豚 ⑦トラジャ豚 ⑧タイ在来豚 ⑨フィリピン在来豚 ⑩カンボジア在来豚 ⑪ミャンマー在来豚 ⑫東マレーシア在来豚。中国南部から東南アジアの山岳地や島嶼域にかけて、小型な小耳種型在来ブタが多く見られるようになる。中にはイノシシのような特徴を持ったブタも飼われている。



①

写真19 南アジア地域で飼われているイノシシ型在来ブタ。外貌がイノシシとは殆ど変わらない。インドイノシシと同様、発達した鬃が見られる。
①スリランカ ②ネパール ③バングラデシュ



②



③



写真20 バングラデシュの遊牧ブタ。時には川をも渡る(撮影：M.O.Faruqueバングラデシュ農業大学教授)。

【寄稿】 最も慣れ易い野生動物「猪」

猟師 中沢嗣地
(沖縄県竹富町猟友会)

明け方 空が白む頃 ガサゴソと音がする

明るくなる頃には居室や台所からルナのブウブウ言う鳴き声が聞こえてきた…。

当時我が家には3種類のケージがあり、それぞれ兎、犬、そして猪の瓜坊が入っていた。檻はすべて違うメーカーで、扉の開閉方法も異なり、スライド式、バネ式、マグネット&フック式と全く違っていた。

その頃漸く4ヶ月になっていた雌の猪ルナは起きると直ぐ内側から鼻と口を使い器用に自分のケージの扉を開け、その後次々と兎と犬のケージを開けた後、食べ物を探して室内をウロウロしていたのである。

生後4ヶ月でこの知能は賢いどころではない!!

2008年頃の2月上旬、猟期も終りに近付いた頃、罨回りの山中で、親と逸れて弱り切った、産れて2ヶ月位の瓜坊を拾う。大きさは丁度ティッシュの箱を横にしたサイズで、重さは3キロ程度だった。

捕まえた瞬間、多少暴れたが直ぐに諦め大人しくなった。家に連れて帰り1時間以上ぬるま湯で隅隅まで洗う。体中にダニがついて皮膚病で全身皮が厚くなりガサガサしていた。



イノシシとウリ坊 『William Jardine "Naturalist's Library"』1834年 ロンドン スティール版画。

翌朝、入れていたダンボールに敷いていたペットシートには、血を吸って真ん丸に膨れたダニが数10匹、点々と小豆のように散乱していた。捕獲2日目の昼頃には瓜坊は警戒心がすっかり薄れ、早くも食べ物を要求してくる程だった。

このダニだらけの甘えん坊の瓜坊を私達夫婦はルナと名付け2ヶ月程飼う事となった。

数日経つと瓜坊の性格がはっきりしてきた。幼い事もありすぐ人に懐くのだが、タイプとしては洋犬よりも和犬に近いように感じた。つまり誰にでもフレンドリーではなく、自分が認めた特定の相手にだけ従順になるのだった。

ルナは私や妻、犬、兎を皆1つの群れのメンバーと認識し、その中で自分のランクをはっきりと決定していた。大人しい犬や兎は当然下で、私の立場も危うかった…。妻は母でありボスだった。その証拠に、妻の隣りや近くに私や知り合いが座ると、背後から忍び寄って甘噛みをしていった。

飼って1ヶ月程するとルナは興味深い行動をとる様になった。毎日夕方5時頃になると急に立ち上って、大きな一間の我が家の中を猛烈なスピードで走り回るのである。しかもその際どこで聞いて覚えたのか、犬そっくりの鳴き声で「ワンワンワン!!」と吠えながら3~4週の猛ダッシュを続けるのだった。

一頻り走り回ると、夕食を食べ、あとは倒れ込む様にグッスリと爆睡するのだった。

ルナの口や鼻が届く場所には一切食べ物は置けなかった。完全に密封されたお菓子等、犬はほとんど手をつけなかったが、私たちが食べている姿や、袋を開ける時のガサガサいう音等、視覚や聴覚を総動員してルナは食べ物を認識していた様だった。



猟に向かう。



ワナの確認。

ルナを飼って2ヶ月、体重は3キロから5キロ迄増し、体も二回り以上大きくなった。そしてついに飼いつける事が困難になる。

一番の原因は、傍若無人の性格から愛犬2匹共、ストレスにより円形脱毛症になってしまった事だ。他にも体が大きくなり室内で飼いつけるのには無理が出てきた。網戸は全て体当たりにより大穴をあけられ、ほとんどの座布団の中綿が筆り引き出されてしまった。

家族で相談し、結局近くで猪の群れを飼っている方の仲間に入れて頂く事にした。

出発当日の朝は早かった。ルナは朝4時頃からゴソゴソし始める。あまりに賑やかなので5時半頃起きてみると、なんと自ら祝杯をあげていたのだった。彼女は今迄手を出した事なかった私の買い置きのビールを箱から2本引っ張り出し、歯で缶に穴を開けてそこからビールを吸い飲みし、見付けた時にはすっかり酔っ払ってフラフラしていた…。

短期間ながら野生の猪を飼ってみて感じたのは、猪という動物は野生の状態から最も家畜化しやすい動物だという事だった。幼い頃から飼い出せば、警戒心は殆どなく、短時間ですぐ人に懐いてしまう。人間の存在や、違う生活環境への適応能力も非常に優れているし、ストレスにも強い様に感じた。

琉球猪は日本本土の猪に比べて小型で最大でも50キロ程度である。とは言え40キロ位でも飼うのは大変だ。それでも広いスペースと十分な餌さえあれば飼育は出来るし、長く世話すれば懐かせる事も容易だろう。実際小さな離島の私の周りでも思いつくだけでも4ヶ所で野生の猪を飼育している。

よく人に「猪はどれ位賢いんですか。」と聞かれる。この質問は人間がどれ位賢いかという事と同様だ。猟期の始まる11月には警戒心の薄い賢く無い個体が次々と罠にかかる。しかし年明けの猟期後半には知能の高い猪ばかりが残り、猟果は非常に厳しくなる。

以前は「猪は犬と同じ位賢いです。」と人に答えていたが、我が家に限って言えば飼って3年と10年目の犬達より、生後3か月の瓜坊の方が遥かに賢かった。

我が家を離れて2日目、ルナは新しい群れの水浴び場に亡骸となって浮かんでいた。そう簡単に余所者は受け入れられないらしい。

結婚して15年、妻が1番泣きあかした日だった。

尚この文章は短い期間で1頭だけ飼育した例で、複数や多頭飼育したわけではないので猪全体を理解したデータではない。あくまで一猟師の私感である。

この文章を今はなき妻恵美とルナに捧げる。

【コラム】

家畜化と女性

筆者はこれまでアジア各地の少数民族の集落で、ブタを世話する多くの女性たちに出会ってきた。高床式の家屋の中ではイノシシのような仔ブタを世話し、時には集落内を連れ歩き、夕刻には放し飼いのブタに呼び掛けし、わが家や飼育舎に呼び戻し、市場では女性たちがブタを持ち寄っていた（写真）。

そして、多くの飼育者に共通している点は、イノシシは男性より女性に懐くということだ。本紙に寄稿された猟師の中沢氏も奥さんとイノシシの関係について、同様の経験を語っている。成長して鋭い犬歯（牙）を持つ雄イノシシでも「妻には良く懐いた」という話は度々あった。事実、かつて本学厚木農場（現・厚木キャンパス）で飼っていた大型のニホンイノシシ雄が男性には懐かなかったが、ある女子学生には

大変懐き、教員たちを驚かしたという。

殊にイノシシと女性には計り知れない何か特別な関係でもあるのだろうか。東南アジアの少数民族の女性たちには、仔ブタに自らの母乳を授けていた民族事例もある。わが子同然のように可愛がる女性たちを観察していると、イノシシの家畜化を考えるうえで、彼女たちの存在は極めて重要だったのではないだろうか。

「農業の起源」の著者C. O.サウアーも、東南アジアで飼われている家畜-犬、豚、鶏などはすべて西アジアに起源をもつ集団的な動物と違って家庭で飼われていた動物であるとしている。これらが家畜化されるようになったのは家庭の中心だった女性の世話と技術によるものとしている。イノシシの家畜化の主役は女性だったのだろうか。

（黒澤弥悦）



①



②



③



④

イノシシ・ブタを世話する女性たち。①奄美大島 ②フィリピン・ミンドロ島山岳地 ③フィリピン・ルソン島山岳地 ④ラオス

【終わりにかけて】 イノシシを知りブタを知る

「ブタを知るには原種のイノシシを知る必要がある」。これは40年前にイノシシの研究を扱った発表が殆どなかった学会で筆者の発表に対して、日本養豚学会名誉会長の故・丹羽太左衛門先生から励まされた一言である。以来、イノシシとブタ、殊にブタに関してはアジア辺境域で飼われているブタを訪ねてきた。辺境域や国内事情で危険地帯と呼ばれる調査地では軍や警察も同行され、また山ヒルの棲む道なきジャングルを越えた集落を訪ねたこともあった。近代化の進むアジアの国々では、そのような地域でなければ在来と呼ばれる原始的なブタの観察は難しかった。今回の企画展ではイノシシと共に、そうしたブタを対象に紹介したことで「ブタになったイノシシたち」とは一体何だろうか、いくらかでも知る機会になったのではないだろうか。

わが国の主要な家畜の中で、牛馬に関しては本格的な登録博物館がある。鶏については国指定の天然記念物である日本鶏が存在することで話題も多い。しかし、ブタに関しては筆者の知る限り剥製を所蔵し、その飼育の様子を展示しているのが沖縄県の名護博物館だ。他に鹿児島県立博物館には鹿児島黒ブタ（パークシャー）と、岐阜市畜産センターに大ヨークシャー雄の剥製が収蔵されている程度である。

ところが、本展準備中にイノシシの剥製を借用するうえで、国立科学博物館を訪ね、収蔵庫



写真 バイヨン遺跡群建造物(13世紀頃 カンボジア)のレリーフに見るイノシシのようなブタ(牛車の下)。このようなブタはカンボジアでは殆ど姿を消しつつある。

を調査した時だ。標本棚奥に全身黒で雌ブタの剥製と思われる標本があり、良くみると、日本の民間研究所が戦前に満州から導入した在来ブタを用いて開発したオーミニブタであった。同研究所は更に小型なミニブタ開発のために、小柄の西表島産イノシシを導入し、オーミニブタとの交配を試みようとしていたので、これにかかわっていたN大学のT先生に連れられ、訪ねた時に初めて観察したのだった。35年前のことである。本展では沖縄の島ブタの剥製と共に、そのオーミニブタの剥製も紹介することができた。イノシシとブタに誘われるような不思議な縁を感じ開催した企画展だった。

(Y)

参考文献

- 中国豚品種誌編集委員会 (1986) 中国豚品種誌 中国家畜家禽品種誌編集委員会 (編) 上海農業科学院牧畜研究所 上海
H.D.ダネンベルグ (福井康雄 訳) (1995) ブタ礼讃 博品社 東京
磯野直秀 (2007) 明治前動物渡来年表 慶応義塾大学日吉紀要 41号36-66
Kurosawa, Y. (2018) Hunting and Raising Activities of Wild Boars in the Ryukyu Islands -Study of Their Domestication. Human Relationships with Animals and Plants: Perspectives of Historical Ecology, International Symposium and Special Research Project of the Museum of Ethnology, Japan.
黒澤弥悦 (2018) 南西諸島の島豚とイノシシ—その知られざる関係 特集 沖縄の在来家畜と人 BIOSTORY vol.27 22-27

- 黒澤弥悦 (2011) 定着するイノシシ飼育 季刊民族学 136 : 71-73
Kurosawa, Y. (2007) Genetic Diversity and Phylogeny of Pigs in Asia. 29th International Conference on Animal Genetics ISAG 2004/TOKYO.
宮地直人 (1999) かごしま黒豚物語 南日本新聞社 鹿児島
西本豊弘 (2003) 縄文時代のブタ飼育について 国立歴史民俗博物館研究報告 第108集 1-15
正田陽一 (1983) 家畜という名の動物たち 自然選書 東京
鈴木啓一編 (2014) シリーズ<家畜の科学>2 ブタの科学 朝倉書店 東京
在来家畜研究会編 (2009) アジアの在来家畜<家畜の起源と系統史>名古屋大学出版会 名古屋

※こばやし ゆうこ

神奈川県出身
女子美術大学卒
学生時代、2ヶ月間インド、ネパールを旅し、人生観180度変化、西表島へ移住し30年

様々な動植物の命との共存を体感、彼らの生命力からパワーを貰いシーサー作りをしています。イノシーサーを含め、同じ物はひとつとないシーサー達は、私の手が産みだした生き物だと思っています。東京農大の魔除けのイノシーサー、ちょっぴりマスケ面とたっぷり愛嬌で、出逢った人々に、ウフフ、アハハの笑顔を与えられます様に。

東京農業大学「食と農」の博物館
平成30年度企画展



写真（左から）ノド黒豚型在来ブタ（ノド黒）



写真（左から）ノド黒豚型在来ブタ（ノド黒）、スマトラ豚、豚豚（ノド黒）、小耳黒豚型在来ブタ（小耳黒豚）



写真（左から）ノド黒豚型在来ブタ（ノド黒）、大型ノド黒豚型在来ブタ（ノド黒）

ブタになった イノシシたち 展

Wild Boars Becoming Pigs - Domestication

平成30年 10月26日[金] ~ 平成31年 3月10日[日]

開館時間 / 午前10時 ~ 午後5時 (12月~3月は午後4時30分まで・入館は閉館時間の30分前まで)
休館日 / 毎週月曜日 (月曜が祝日の場合は火曜)、毎月最終火曜日・大学が定めた休日 入館料 / 無料

東京農業大学「食と農」の博物館 1階企画展示室

| | |
|--|--|
| 講演会 日時 / 11月10日(土) 13:30 ~ 15:30 会場 / 当館2階セミナー室 演題 / 「知られざる遊牧ブタの世界」 講師 / 池谷和信 (国立民族学博物館教授) | ギャラリートーク 日時 / 11月2日(金) ~ 11月4日(日) 13:30 ~ 14:30 会場 / 当館1階企画展示室 講師 / 東京農業大学「食と農」の博物館 学芸員 |
|--|--|

【主催】東京農業大学「食と農」の博物館 【共催】東京農業大学学術情報課程・履修学生 【後援】一般財団法人畜産学研究所 在来畜産研究会
【協力】国立科学博物館 長崎歴史文化博物館 名産博物館

poster design : sponchi + studio shibasaki

農 東京農業大学
「食と農」の博物館
Food and Agriculture Museum
TOKYO UNIVERSITY OF AGRICULTURE

〒158-0098 東京都世田谷区上用賀2-4-28
TEL.03-5477-4033 FAX.03-3439-6528
www.nodai.ac.jp/syokutonou



平成30年度の特別展・企画展

■企画展 ぶたになったイノシシたち Wild boars Becoming Pigs -Domestication

- 【会 期】2018年10月26日(金)～2019年3月10日(日)
【共 催】東京農業大学「食と農」の博物館(代表:館長 江口文陽) 学術情報課程
【監 修】東京農業大学名誉教授 田中一榮
【企 画】企画展実行委員会
上岡美保(委員長)、黒澤弥悦、黒川孝明、西嶋 優
大石康代、村山千尋、伊東 綾、木村李花子(学術情報課程)
【協 力】奥州市牛の博物館 国立科学博物館 国立歴史民俗博物館 長崎県立歴史文化博物館
名護博物館 西谷 大(国立歴史民俗博物館副館長) 鈴木伸一(元東京農業大学教授) 鈴木 迅(写真家)
【後 援】一般財団法人家畜研究所 在来家畜研究会

■関連企画

- 講演会 日 時 2018年11月10日(土) 13:30～15:30
会 場 本館2階セミナー室
演 題 知られざるぶたの遊牧
講 師 池谷和信 国立民族学博物館教授

ギャラリートーク

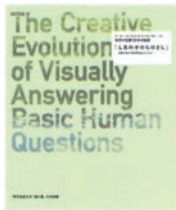
- 日 時 2018年11月2日(金)～4日(日) 13:30～14:30
会 場 一階企画展示室
講 師 東京農業大学「食と農」の博物館学芸員

刊行物のお知らせ

■図録『ピーター・メンツェル&フェイス・ダルージオ 地球の記録20年の軌跡

「しあわせのものさし」—持続可能な地球環境をもとめて—

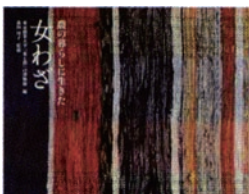
(内容) 人々の営みに様々な問いかけをもちながら、20年にわたり世界中を旅した報道写真家とあるがままの事実を綿密に記録したジャーナリストでありプロデューサーでもあるパートナーとの壮大なプロジェクトを物語る写真展の図録である。



(判型) A4 判変型 横型 並製 88頁
(企画・編集) 東京農業大学「食と農」の博物館
(装丁・デザイン) 木村正幸(デザイン工房エスパス)
(発行) 一般社団法人 東京農業大学出版会 平成28(2016)年6月1日
(価格) 2,600円+税

『農の暮らしに生きた女わざ』

(内容) その土地特有の自然と共存しながら長い間祖先から受け継いできた生活文化は、名もなき多くの女たちによって守られてきた。女たちが必死に紡いできた生活文化を、ともすると顧みられることもなく、当然のように捨てられてきたであろうただの「布」たちが語ってくれる。



(判型) B5 判変型 上製 144頁
(企画・編集) 東京農業大学「食と農」の博物館
(監修) 森田圭子 修紅短期大学名誉教授、「女わざの会」代表
(装丁・デザイン) 木村正幸・山本亜希子(デザイン工房エスパス)
(発行) 一般社団法人 東京農業大学出版会 平成28(2016)年3月10日
(価格) 2,500円+税

『日本人と馬 一垆を越える十二の対話』

(内容) 信仰・民俗・歴史・考古・社会・科学・芸術と多分野にわたる識者達による対話が、様々な角度から人と馬の関係を照らし出す。



(判型) A5 判 上製 420頁
(企画・製作) 東京農業大学「食と農」の博物館、東京農業大学教職・学術情報課程
(編集) 設立10周年記念特別企画展示実行委員会と「十二の対話」委員会
(装丁・デザイン) 木村正幸(デザイン工房エスパス)
(発行) 一般社団法人 東京農業大学出版会 平成27(2015)年3月30日
(価格) 4,000円+税

『樹木の形の不思議』

東京農業大学短期大学部環境緑地学科・特定非営利法人樹木生態研究会 編
一般社団法人 東京農業大学出版会 平成26(2014)年3月20日 発行
A5 判 並製 158頁 2,000円+税

『耕す 一鋤と犁』

東京農業大学「食と農」の博物館 編
一般社団法人 東京農業大学出版会 平成25(2013)年3月30日 発行
A5 判 並製 115頁 1,500円+税